

瑞岩寺報

2011.01.01
(平成23年 睦月)

【正月号】

◎お正月ご祈禱法要

お正月は毎日、天地が招福除災を祈念する
大般若ご祈禱を勤行します。

お正月は前年の悪を反省し、新たな
年の誓いを立てる、年初めにふさわし
い行事です。

* *

ご祈禱は左記の通り行なわれます。

厄年厄除・病氣平癒・交通安全・良
縁成就・開運厄除・家内安全・無事成
就・商売繁盛・学業成就・試験合格な
どのご祈禱のお申し込みは同封の申込
書をお寺まで持参されるか、ファック
ス(367-55335)してください。

* *

【期 日】

1月元旦(土)

1月2日(日)

1月3日(月)

【時 間】

午前10時〜午後2時頃の2回

【ご祈禱料】

ご祈禱紙札(小)

ご祈禱木札(中)

ご祈禱木札(大)

3,000円

5,000円

10,000円

お正月総合案内

【お願い】

一、お願い事は二つまでにしてください。

一、ご祈禱札にはお守りがつきます。

一、法要後、お祈禱札をお持ちくださ
い。

一、法要にはなるべく本人がご参加く
ださい。

一、希望の方には郵送しますので申し
付けください。

* *

◎年始参詣

【期 日】

1月元旦〜3日

【時 間】

午前7時頃〜午後5時まで

※年始参詣にお寺にお参りに来られ
ましたすべてのお檀家さまにはすば
らしい瑞岩寺カレンダーをお渡しし、
祝茶を差し上げます。是非、皆様お
揃いで気軽にお出かけ下さい。



Attention!!

※以下の点にご留意ください

◎お祈禱法要について

お祈禱札について、申込書を持参、またはFAXしてください。

※ご祈禱料の振込み用紙を同封します。市内・県内外の方は同封の振込用紙をお使いください。

◎お墓まつり

【期 日】

12月26日(日)

【時 間】

午前7時頃から

お正月が近づいてきました。お墓のお掃除
をしましょう。この暮のうちに仏壇をきれいに
して鏡餅を供え、お花を飾り準備を整え、
元旦早朝、若水を汲み供え、一家そろって仏
壇に手を合わせ、よき新年をお迎えになるこ
とは、私たちの善行の始まりだと思います。
さらに、お寺に参拝してご先祖様に感謝の誓

……………瑞岩寺にお墓のある方へご案内……………

いを祈ることこそ意義深い初詣になると思
います。一斉お墓掃除を右記のごとく行な
います。たまには早起きしてお墓掃除も気持ち
いいものです。お子さんやお孫さんごっし
よごいひ。

※強制ではありません。また、上記以外の
日や時間も受け付けております。

※自分のお墓の掃除が終わったら、通路など
共有の場所のお掃除も積極的にお願いしま
す。

※遠方の方はお寺でやっていきます。ご
安心ください。

※飲み物はお寺で用意してあります。

……………厄年早見表……………

◇からだの変わり目◇

	後 厄	本 厄	前 厄
男の大厄 42歳	昭和44年	昭和45年	昭和46年
女の小厄 37歳	昭和49年	昭和50年	昭和51年
女の大厄 33歳	昭和53年	昭和54年	昭和55年
男 25歳の厄年	昭和61年	昭和62年	昭和63年
女 19歳の厄年	平成 4年	平成 5年	平成 6年
幼児 4歳の厄年	平成19年	平成20年	平成21年
男女 61歳の厄年	昭和25年	昭和26年	昭和27年
13歳詣り	男女 平成11年		

特集●インタビュー

碑文谷創さん

雑誌「SOO」(表現文化社)編集長

()に聞く

長谷川俊道(以下副)◆本日はよろしくお願ひいたします。

東京のお寺の10軒のうち8軒が門が閉まっているといえます。このような現状の中、今後の葬式の形、お寺やお墓の未来というものはどのような形になっていくとお考えでしょうか？

碑文谷創(以下碑文谷)◆私の父はキリスト教の牧師でした。私もプロテスタントです。戦後、生まれ育った一関では、よく「交通費がない」というような人がいました。しかし、最近の都会の賽銭泥棒はきちんとスーツを着ているのが特徴だそうです。

◆高齢者の現状

現在、高齢者のいる家庭は50%近くになってきています。でその高齢者の半分は単独か2人世帯。3世代同居がほとんど減っている状況です。地方では単独世帯が増加し、都会では地方で生活できない両親を東京に呼び寄せる「呼び寄せ老人」が結構多いんです。「呼び寄せ老人」の場合には、近くのアパートに

住ませるので、近所との付き合いができません非常に寂しい思いをされています。

北海道では、自治会という組織が昔からしっかりありまして、葬儀を自治会で執り行うことが通常で、葬儀委員長(学校の先生や地方の有力者)が儀式を仕切っていました。葬儀の人数を予想し、総収入を決め、その収入と支出がゼロになったときの会計係は喝采を浴びたそうです。しかし、そんな北海道でも10年ほど前から互助会の葬儀社が入ってきてまして、がらっと一変したそうです。もともと、自治会館で葬儀をしていたところと、サラリーマンが多くなって、葬儀の度に休めない人が増えたこと、葬儀を丸投げすることによりラクなほうになびいてしまったことなどが理由にあげられます。地域中心から葬儀社中心に変わったんです。もう地域社会が葬儀を担えなくなってきたことが大きいと思います。

また、80歳以上で亡くなるお年寄りが全体の死亡者の半分を超えました。昭和の初め頃は3〜5%でした。その頃は80歳を超えた方の葬儀はある意味お祝いのような感覚で盛

大に行われたものでした。ところが現在では、家族と一緒に住んでいなかったり、認知症の方も3分の1以上、そして脳梗塞などの麻痺などを抱えている方も多いのが実情です。ですから日常の生活を他人に頼らないといけない。自分でトイレに行けないことが非常に人間の尊厳を傷つけるようです。頭のはっきりした人は周りへの気遣いで萎縮し、認知症の人は自分だけのけ者にされたような被害妄想が強くなります。私の母も97歳で認知症です。

最近の人間の最後のターミナルは実は「多くの人は自分自身で選べない」時代になってきています。

介護保険でも充分ではない、「老老介護」で介護する人も大変。そうして迎えた死という形になりますから、非常に複雑な様相を呈しています。長生きすることによって、かえって世間とのつながりのない期間が増えてしまっているような気がします。実は、日本人の無常観というのはよくできていて、実は「死」は「老」のあとに来るのではなくて、元気な人もいつ死ぬかわからないというところまで成り立っています。しかしそれが今、多くの人が「老」のあとに「死」が来ると考え始めています。だから、その「死」というものの対処の仕方がまだよくわかってないのかも知れませんね。

◆変わってきた葬儀とお墓

実は1960〜1970年代の高度経済

成長の時代に、今ある葬儀社の多くが誕生しました。その頃から、葬儀社が地域社会の代わりの役を担ってきました。その期間が長いので、地域で葬儀をするというような意識はもう持てないでいます。東京などの場合は、地域習俗自体そもそもないわけです。今は、高齢者でさえ葬儀のシロウトになっています。

都会ではそもそも菩提寺を持たない人が6割以上います。東京の場合は9割以上が地方出身者です。田舎のお寺は二・三男が都会へ出て長男は残るので、ある意味安心してた。しかし、その都会に出た、二・三男は糸の切れた風のような状態になっているという問題があります。今後地方と都会の関係性をどのように取り戻していくかが課題です。「樹木葬」を始めたのは「関の祥雲寺ですが、住職は「里山再生を通じて、東京にでていった人間にある意味ふるさとを作るようなことをやりたい。都会とふるさとの橋渡しをしたい」と言っていました。

永代供養墓の先駆けである新潟の「安穩廟」も、最初は全国から問い合わせがありました。しかし、次第に地方の人たちの関心が増えてきて、今は新潟出身の方が非常に多い。

都会の「無仏派」の人たちをどのように田舎とつなぐか。田舎の菩提寺の住職が東京の7月盆を回ったりして、つなぎ止める。住職一人ではできない場合は、近隣のお坊さんをお願いしたりする。そういったネットワークを結び、檀家さんは安心して暮らすことができます。知らないお寺のお坊さんが来るのではなく、地元在住のお坊さんにつながる人が来る。情報を交換し合い、密にする。



きちんとつながりを作り直すことが必要なんじゃないかと。

葬儀のことで言えば、今は親の人間関係を子どもが知らない、めんどうくさい、だから自分たちだけでやろうとする傾向がある。知っている人は呼ぶのですが、そういう意味で葬儀が「共同体」のものから「個人」のものになってきている。

年配の方々には、戦争中兵士、民間人併せて数百万人死んで、その遺骨が無かったりしてロクな葬儀ができなかったという悔しい思いがあります。

昔の葬式は周りの共同体の人たちがみんなやってくれて、遺族は悲しみに専念してればよかったです。また口も出せずにいました。そういう恩義を受けたので、次に他の家に葬儀ができたときには、義理を返すという形でお手伝いに行きました。しかし今は葬儀場でや

るので、その部分がすっぽりと欠落し、遺族だけが孤立する。

遺族が孤立し、経験もないので分からない。そのすぐ側にいるのが葬儀社です。

一時は葬儀社のいわれるとおりに行っていたけれども、ああいうのはもういやだと思いはじめてきた。バブルの頃の葬儀の会葬者の平均が280名位。しかし、生前の故人を知っていた人は3割。あとは子どもの取引先などが7割を占めていたので、「その人たちに失礼のないような葬儀」というものをやっていたわけです。だから、遺族は葬儀が終わるまではじっと我慢していて、葬儀が終わって皆が帰ったあとやっと仏壇の前でしみじみ泣いていた。それが、2005年に会葬者の平均は132名になりました。本当に故人を知っている人だけが来るようになった。また、地域に任せておくとお手伝いが多くて日

当を沢山払わなくてはいけない、葬儀社のほうがラクでいいというのもあるようです。

2010年では会葬者の平均は1000人を割って60人くらいのお葬式が増えています。それも大きく2つに分かれていて「放っておいてもみなが柩の前に集まるお葬式」と「放っておくと棺に誰も近づかないお葬式」に分かれます。

大体一般の人は葬儀に関わるのは10年に1度くらいです。昔は近所であったので大體知っていた。しかし、今はなにも知らない人が増えたわけです。そもそも昔はお布施をもっていくのも、葬儀がすべて終わった翌日「お礼参り」と言っていました。それが今はお世話になるといいうことでお通夜の前に渡すようになっていく。

今は、自宅で亡くなる人は12%位。その他の人は病院などで亡くなります。病院から

直接葬儀場に行きます。私が「直葬」という名前をつけたのですが、昔は「送る」という字のほうの「直送」でした。しかし、今はお葬式そのものがないのもあります。昔は1回は自宅に戻ったものです。そして、枕経、通夜、納棺をして葬儀場に行ったものです。

だから、最近は枕経が無くなった。そのため、お坊さんと直接会うのがお通夜の直前になってしまった。したがって遺族のことに關している話し合う時間がない。枕経のときだったらいろいろ聞けるけれども、通夜のときは時間がない。お坊さんによってはきちんと電話をする方もいる。お坊さんが遺族の立場になって、気持ちになって僧侶のほうから聴くようにしないといけない。葬儀を僧侶が取り仕切らないといけない。そして「自分が送る」ということを見せないと遺族そのものも「送る」という気持ちを持たないでや

ってしまう。

枕経のときでも、通夜の前でも、葬儀の間でも時間はある。そのときに僧侶が話せば全く知らない人でも、その遺族の人たちの気持ちや少しは変えられる可能性はある。だから今、遺族が孤立しているから昔よりもむしろ僧侶に期待される部分が多いんじゃないかと思っんです。親戚も冷たいし、町内会も知らない、だからお坊さんくらいしかいないんじゃないか。しかし、それを今は葬儀社がやっている。葬儀社の中にもいい人間と悪い人間がいる。僕は今、枕経のときに僧侶を交えて話し合いをしないといけないと言っています。それが原則だと。

そして、遺族も僧侶も葬儀社も交えて話し合いをして決めないと、もうちゃんとした葬儀はできないだろうと。ただ、葬儀をしたからってそれで済むものじゃない。その位、今危機感があるんです。

寺とネットワーク

私は、新潟の妙光寺の住職さんに、東京の葬儀社のご話を聞かれました。つまり、住職さんはつながりを東京でも作っている。だから檀家さんはある意味心配していない。住職さんがそこまでしてくれるのでいつでも相談に行く。お寺の批判をする信徒がいません。お寺の行事やイベントで人と人がつながり、その輪が広がっていく。住職一人のお寺ではない。檀信徒をうまく活用することがこれからお寺のあり方なのではないでしょうか。

かつて生活仏教と呼ばれた時代は、檀信徒

のためだけではなく、地域にとつてのお寺という意識があったんじゃないかと、そんな意識があったからこそ根付いていたし、必要とされていたのでしょ。公民館のような機能が期待されることもあった。

お寺がかかえる地域の問題はパブリックなものがあります。それが、最近ではパブリックなお寺の位置づけがなくなってきた。自然発生的な地縁、血縁が弱くなってきている。それを昔に戻すのではなくて、新たに作りあげていかなければと思うんです。ある意味「絆」とかいうもの。放っておくとどんどん薄くなって、孤立してしまふ状況だから。たとえば、ケースワーカーとか、訪問看護師とか、税理士さんとか、弁護士さんとか、行政書士さんとかいろんな人のネットワークを作っていく。その情報の集約点として、お寺という場所は最適なのではないかと思うんです。

私の知り合いの僧侶には、「本堂で葬儀しようよ。」と言っています。近所の人が入りこむので、お寺の奥さんにとって負担でした。でも、今は幸い葬儀社に頼むようになったから2つ3つの葬儀社にきちんと頼んでおけば準備も片付けも片付けも心強い。さらにお寺にはすでに立派な荘厳がある。別に祭



壇を組む必要はない。昔は内陣には柩をいれないということもあった。地域の仕出し屋をうまく利用すれば食事もできる。そういう工夫をして本堂で葬儀をすれば、だいぶ意味が変わってくるんじゃないか。あの僧侶にやっていただいたという気持ちが生える。ようするに葬儀をする人が遺族から信頼を得ているということ。お坊さんが葬儀で入場するとき

に、最近では司会者に言われて合掌します。本来それは言われてすることではなく、自然に合掌したくなるのが一番いい形です。

お坊さん、それも30代、40代の問題意識をもった人たちにアクセスしていきたい。火葬場の炉前でお経を読むことが、まだ仏教が残っている」と考えるのか「もうそれしか残っていないと考えるのか」。若い僧侶が現場で遺族の方に接して感じている、そういう発言がもっと欲しい。

東京では、遺族に「菩提寺があるか」と聞く葬儀社が少ない。地方からくるはずがないと思っっている。しかし、地方のお坊さんは喜んで行くという人が多いです。でも、どうしても来れないという場合はその僧侶に紹介してもらえない。それでもいい場合は葬儀社が紹介するしかないけれども。

ある意味、葬式は多様化しています。きちんと申おうという人はきちんと申っているし、そうじゃない人はそうじゃないという。昔は自宅で葬儀をやっていました。だから、葬儀とはこういうものかや、家族の悲しみも知ることができました。周りの人もしなくなるとも合わせてやっていた部分もありました。しかし、今は斎場でやるので誰も見ていないところでもやる訳です。だからなんでもありになってしまふ。

長く施設に入っていたりすると、居場所がなくなるといふこともあります。帰ってきてもスペースがありませんといわれることがある。葬儀社も家を片付けなくて済むという理由で自宅に帰らなくていいように斎場（会館）でするように勧めます。これも葬儀社によっても違いますし、お坊さんによっても違います。だから、できるだけいいお坊さんや人をネットワークしていくということでしょうね。創価学会や立正佼成会がなぜ伸びたかというところが疑念を形成した。葬儀や、就職、受験の世話などもしてくれていたんです。なにか困ったときにはすぐに来てくれて話を聞いてくれたんです。

でも、まだお寺というのはネットワークを作る部分では優位な部分が残っていると思っます。

案外、一回寺の外にでて海外や外の世界から日本や寺を見てみる経験をする僧侶としてもちょっと違うみたいですね。

今は若い僧侶の人がいろいろと活動していますよね。

副◆葬儀に関していえば、瑞岩寺でも本堂

や書院やホールで葬儀ができるように整いつつあります。書院は10名程度しか入りませんが…。

碑文谷◆◆小さいながらもそこで葬儀ができるというのは、檀信徒さんにとっては安心です。副◆◆お寺で葬儀をすると葬儀社の方が反発することはないでしょうか。よく思っている葬儀社はないのかもしれないが…。

お寺が葬儀を取り仕切ると、葬儀社は物を用意するだけで何もやることがない。だから、瑞岩寺では事前に葬儀社を決めています。遺族のほうではほとんど手配しない。松本の神宮寺などではだんだんと葬儀社を使わない方向に向かっていきます。

碑文谷◆◆お寺でやるときには、住職一人だけじゃなく、手伝ってくれるスタッフがいるといいですね。今は定年後の元気な人がいますので、檀家さんに手伝ってもらってもよいかも知れません。そういう人たちとお寺の今後を考えていったり…。

葬儀は7割がソフトです。安かろう悪かろうではなく、仕入れルートが確保できれば、気心を知っている僧侶がやるほうがいいでしょう。葬儀社はいろいろです。よい所あれば悪いところもある。それが表にでないの一般的な人はわからない。料金がきちんとでないの、よい悪いを判断できません。

◆永代供養墓とこれからの寺

瑞岩寺では、永代供養墓はやっているんですか？

副◆◆はい。合同型の永代供養墓『永遠のいのち』と、相統型の『安穩廟』の形、そして来年の正月に出来た、樹木葬『木もれ陽』があります。ある意味お墓のデパートみたいなところもあります。どんな状況の場合でも対応できるように配慮しています。墓石や仏壇・仏具のルートも確保しましたので、ご希望があれば市販の半分くらいの金額でご提供することができます。

碑文谷◆◆お寺というのは、可能性からいえば非常にありますよね。

副◆◆またまた駆け出しですが、座禅会、写経会、各種寺子屋講座や、ライブ、講演会、イベントなどを通じて地域で楽しみを提供する存在になりました。去年の新井満さんの寺子屋ライブには500人、今年の中島啓江さんは300人以上がご来場いただきました。これからお寺の機能として特養などの施設を整えていきたいと考えています。認知症などで老人ホームを追い出された老人はお寺のほうがかえって安心できるのではないかと。保育園も運営していますので、「生老病死」の全体に関わると、もっとサービスが広がると思います。子供と老人がふれあえる場所も提供できるのではないかと…。

碑文谷◆◆最近老人病院でご老人が亡くなったときに、裏口からじゃなく正面玄関から出ていくほうがかえってみなさんに喜ばれるそうです。自分もいつかそうなるので、最後まで大切にしてください。

お坊さんというのはターミナルという視点で物事を見るのがいいですね。葬儀社にはそういう視点はない。

副◆◆安心してつきあえるところは、みんな

欲しいと思っています。孫をつれて、ここは行っていいんだよ、というところがいいですね。今はみな「分断されて」生きていますから、何かあったら相談できるという、そういう場所があるといい。または時々来て話をきいてくれるというか。

永代供養墓をきちんとやっているところだと、普通の墓より永代供養墓の家族のほうがお墓参りを自然にやっている。本人は迷惑をかけたかと思うと永代供養墓に入っても、家族がきちんと受け止めていればお墓参りに出かれます。ようするに義務づけられていないからなんです。仏教情報センターの故草野榮應さんなどは、多宝塔の永代供養墓を作られて「今までは供養は義務としてとらえられていたけども、これからは権利としてとらえられなくてはいけない。」とおっしゃっていました。

先ほど話にでた妙光寺でも「安穩会員」の多くの人がすでに2世になっています。そして、新潟地域の人が増えています。ニュースになると全国から最初は来ますが、活動が見えてくると地元の人が増えてきます。それから、すでにお寺がある人が、別の寺に葬儀を頼みに来るという話もあるそうです。そんな話を聞くと、もうすでにお寺も選ばれる時代になってきたのではないかと思えます。東京などではすでにお寺を抜ける人ができています。

碑文谷◆◆(財)シャント(元曹洞宗ホランテイア会)などとてもよい活動を行っていますね。お寺のいろんな活動が世の中に見えるようになってくると、世間の反応が変わって

くると思います。たとえば、「あのお寺になら寄付をしよう」という人がでてくる。そして、お寺はそれを利用して、葬儀をする書院や宿泊所を作ったり、利用者がより使いやすいうに設備を整える…。大きな看板で寄付の名前を出すことよりも、たとえ小さな仏具一つでもみなさんの寄付を忘れないということ、そしてみんなが参加している意識を持つというのはいいですね。

話が変わりますが、僧侶であり作家の玄有宗久さんなどは、「私は仏教が7割で…」というふうにご発言されています。僧侶なのに10割でない。でも、それは簡単に越境できるという自由度がありますね。宗派の中で管長になるような方は、修行が長いので世間と離れている期間が長いわけです。そうすると有り難いけど、世間には疎いということになりやすい。僧侶の葬儀の中で鎖籠、起籠あるいは拳籠(こが)というのがありますが、若い世代の僧侶はそれがわからない。以前は葬列の出発するとき、遺体を籠に入れて鎖をかけ、出棺して火葬したんですね。しかし、今は葬列をしない。それを擬似的に1時間の法要の中に詰め込もうとするからへんなんです。実際は、死亡するとそのすべてのプロセスのたびに僧侶が集まってお経を読んだということなんです。だから、そのプロセスを大切にしたい。そうするとお寺でお坊さんが葬式をするのが一番いいわけなんです。

人間60代に入るとどうしても守りの姿勢に入ります。若い世代のお坊さんに期待したいです。

●小川宏さん講演会

『生きる』

—うつつ病を体験して見えた大切なもの—



9月4日、元アナウンサーの司会者の小川宏さんをお迎えし、寺子屋講演会を開催しました。200名以上の参加があり大盛況でした。ユーモアあり笑いあいの講演会でした。

小川さんは、ご自身がうつつ病を体験し、克服した経験から、「生きる」をテーマにお話をされました。

闘病中、友人からの手紙にあった『辛』という言葉は、あと「息で『辛』になる」という言葉に励まされたという。処方箋のない薬のような。それから快方に向かった気がする」と心のこもった言葉の大切さを訴えています。

また、くよくよせず、プラス思考で生きていくことや、「異性に関心を持つ」「人間関係は適度な距離を置く」など、人生を豊かに過ごすためのコツを、自らの例えを交

えながら面白おかしく語っていただきました。

◆小川宏プロフィール◆

1926年東京生まれ。早稲田大学卒業後、NHKにアナウンサーとして入局。福島、山形、東京放送局などを勤務。1955年から司会を担当した「ジュエスチャ」は、NHKの看板番組となり、全国のお茶の間ファンを引きつけた。1965年にNHKを退職し、フリーとなり、フジテレビのワイド番組「小川宏ショー」では、「ご対面」のおもしろさを引き出す「初音談義」で人気を博す。1982年の終焉までの17年間、4451回の放送記録を作る。老若男女、誰からも好かれる庶民性と人間味あふれる司会・進行とアドリブで、視聴者の心をつかちつづめて、従来のアナウンサーのイメージを一変し、時代案じた。現在は、テレビやラジオに出演するかわり、講演活動や執筆活動を中心に活躍中。

●いのちキラキラ寺子屋ライブ

中島啓江さん

『生きる力』

「明るい寺子屋瑞岩寺」では、当檀信徒はもとより、志を持つすべての人々へ1000回を目標にこの学びの場を提供しています。

第3回目となる今回は、テレビでもおなじみのソプラノ歌手、中島啓江(けいこ)さんでした！

境内には1000本のキャンドルを灯し、幽玄な雰囲気を感じました。

悪天候にもかかわらず3000人近い人々においでいただき、なごやかな空気の中、楽しいトークと共に、『千の風になって』『この街で』『アメージンググレイス』ほか9曲を披露いただきました。

中島さんが子供の頃体験した、ひどいイ

.....秋のイベントを終えて.....



ジメの話。また、10年前に最愛のお母さまを亡くし、それから、『千の風になって』を歌う度に泣いてしまい、歌えなかったこと。でも、そのうちに、天国の母に『啓江、あんたいつまでも泣いてんじゃないよ。早く笑顔になって元気な姿をお墓に見せに来てちょうだいよ。』って言われた気がしたんです。一番大切な人を亡くしたあとに聞きたい言葉は、どこか遠くからでもいいから『啓江、もう泣くなよ。』っていう言葉です。それが歌っているうちに分かって、すごく元気になりました。』という話など、い

ろいろなお話を聞くことができました。今回は瑞岩寺が葬儀のときに行っている『千の風になって』と、お経『般若心経』とのコラボもさせていただき感無量でした。本堂だけではなく、境内を埋め尽くした人たちは、中島さんのすばらしい歌唱力で酔いしれ、トークに笑い転げたそんな楽しいひとときでした。どんなに辛いことがあっても「ありがと」って魔法のことは勇気をもって言う力を中島さんからいただいた気がする、そんな夜でした。

◆中島啓江プロフィール◆

鹿児島県出身。昭和音楽短期大学テュボロミア・オペラ専攻科修了。藤原歌劇団出身。春丘紀実、故・砂原美知子、マルチユウコ、コウオニ女史らに師事。1986年には、初のソロコンサートを行う。その後、宮本亜門演出の「MORIMORIMAN」に出演し高い評価を得る。テレビでは、NHK「音楽夢コレクション」『夢りんりん丸』TBS「いっかすバンド天国」ラジオでは、TBS「悠里のゆうゆうワイド」にレギュラー出演。

著書に、「今日も元気だオヘアガみたい」、「じゃあね」、「いつも心にありがとう」など、2006年には、自身の体験をもとに絵本「私からありがとう」を2008年に「絵本」で「私からありがとう」(右波書店)を発売。

また、ミュージカルでは2001年東京国際フォーラムにて、プロットフェイのミュージカル「LANDER」に出演。2003年シアターアップルにて「Blues in The Night」に主演。銀座博品館劇場で恒例の「コンサート」を「夢で逢いましょう」は2010年で17回目を迎える。

2006年より後世に残し伝えていく「CD」を伝えているシリーズを発売。『千の風になって』が大好評を博す。2007年「この街で」(2008年)、「重神(わらびがみ)」、2009年には、「見上げてごらん夜空の星を」を発売した。

同年より童謡「川風の啓発活動員」お啓ちやんとして、広く多くの地域のみなさまに「童謡「川風の」の魅力を伝え、地域の音楽家、教育者、音楽文化に貢献している。阪神・淡路大震災の追悼無料コンサートは、2010年で15年目となり、自身のライフワークとなっている。物質文化が進み、現代に欠けてしまっている「心」の復興に努める活動を精力的に行っている。

●瑞岩寺の「想い」——頼りになる寺でありたい——

人の一生は、生・老・病・死と共にあります。そして、それらには「苦しみ」が付きまといまいます。生苦、老苦、病苦、死苦…、これを仏教では「四苦」と言い、日本仏教は、その時々に応じて、四苦を和らげ、解決することを使命としてきました。しかし、この時代において、仏教が「苦」と向き合い、それを緩和し、解決する具体的な場面や道筋は、なかなか見えません。

* * *

高齢化社会を迎え、老苦・病苦の現場は、さまざま問題を生み出しています。そして、その先には、誰もが、平等に、死苦に直面するという現実が訪れるのです。人生の最後に訪れる死は、膨大な悲しみや苦しみ、痛みとともにやってきます。そして、それはあなた自身が対面しなければならぬ一人称の死であり、あなた自身の問題となります。しかし、そ

れらへの対応は、なかなかできないのが現状です。

* * *

瑞岩寺は、四苦の存在、生苦・老苦、死苦における多様な問題、容易ではない死苦の受容などについて、深い関心を持っていきます。そして、そのためのシステム作りを少しづつですが整えています。瑞岩寺の檀信徒を中心にした地域の人人々を対象に、ひとりひとりの生老病死に寄り添い、四苦と向き合いながら、生きる方法を探り、実践することです。

* * *

そのために人生相談、悩み相談、寺子屋講座、座禅、写経、講演会、観音巡拝、旅行、本山研修、寺子屋ライブ、葬儀・墓石・仏壇の請負、などをできるかぎり行っています。なにかお困りのときは、是非、お寺にご一報ください。

台掌



お寺が仏事(葬儀・仏壇・墓石)を取り戻す理由

かつて寺院は寺子屋に象徴されるように人々の学びの場として高い教育基盤を社会に与え、仏教は生老病死の四苦八苦の荒波を乗り越えるための妙薬として人々の心の支えとなっていました。しかし、日本の伝統仏教教団が「葬式仏教」と揶揄される今日、仏教を真剣に学ぶ場としてお寺の本堂が有効に活用されることも少なく、「この時代の」「宗教教育の大切さ」を叫ばれながらも、社会に果たすべき役割を満たしていないことも事実ではないでしょうか。

* * *

だからこそ、とても大切な宗教行事である葬儀を葬祭セレモニーホールではなく、本堂で、葬儀社主導ではなく、住職が指導し、喪主が主役になり、家族全員が参加する参加型の葬儀が可能です。また高価な仏壇や墓石も日本のデフレ経済のなかでは檀信徒の大きな負担になっています。そこで瑞岩寺では、新規に「葬祭部」を立ち上げ、葬儀、仏壇、墓石などの仏具を安価な価格で提供しようと努力した結果、通常価格の半額程度で提供できるようになりました。必要な方は、ぜひご相談ください。

* * *

瑞岩寺は当寺の檀信徒はもとより、志を持つすべての人々へ、心の寄り所となる信仰の場を提供してゆきます。

* * *

▼寺院が仏事供養全般を網羅することによって、檀信徒の経済的負担を軽減します。

▼寺院の経済的運営に寄与し、高額な寄附の要請をしなくても済むようになります。

▼宗教行事は、あくまでも自発的なお布施(浄財)を軸に運営していきます。

▼本堂で葬儀を行なうことで形式にはまらない、個性的で温かな雰囲気の中、コストを抑えた葬儀を提供します。

▼墓石や仏壇を寺院が請け負うことにより、同じ予算での満足度の高い高品質の仏具を提供します。

【上段祭壇写真】上より、ホール、書院、本堂

●群馬初の樹木葬墓地竣工 —瑞岩寺の新たな取り組み

みなさんは、「樹木葬」という言葉をご存知でしょうか？ 山の中の区画に自分の好きな樹木を植え、そこに散骨をするのです。

日本で初めての樹木葬が生まれたのは1999年、岩手県の祥雲寺のご住職が、里山を再生させるために始められたのが最初といわれています。

それは、自然を大切にしている現代人の考え方にマッチし、多くの支持を受けています。

近年、NPO法人エンディングセンタ―が「桜」の木を主にした「桜葬」や、都会にあわせたコンパクト型の「宙」などを手がけ発表しています。また、川崎市も市営墓地を樹木葬にするなど、官民で広がりを見せています。

今夏、瑞岩寺が群馬県で初めて「樹木葬」の認可をうけました。

今月からやると工事が始まります。

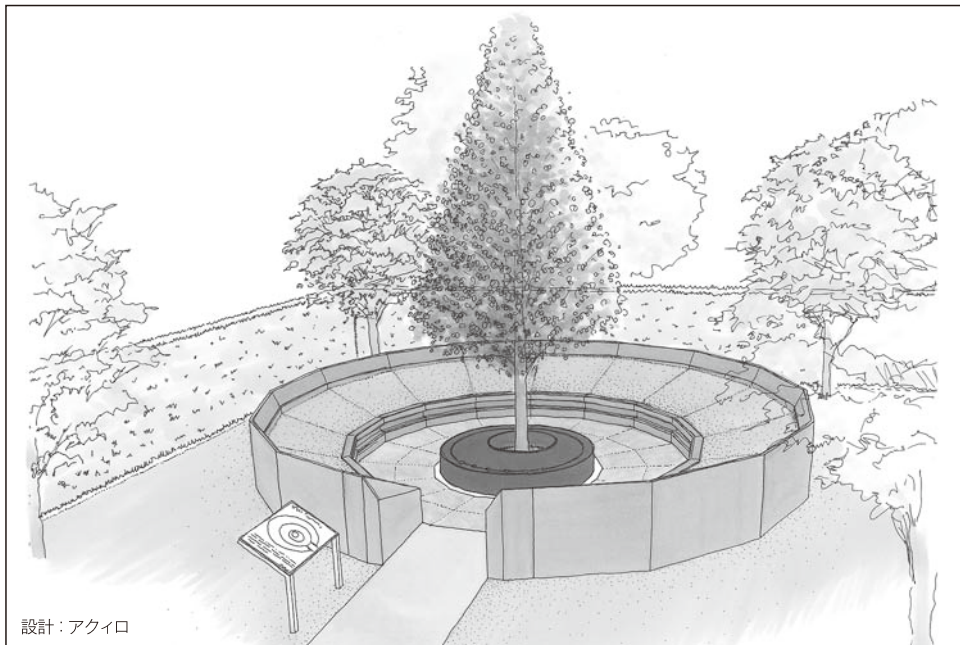
既にお問い

合わせを何件がいただいており反響の大きさを感じています。没後のお墓の維持ができない、子どもが近い、娘が近くに住んでいない、墓地墓石に数百万もかけたくないなど、理由はさまざまです。

世の中には、時代と共に変わってゆくもの、そして

この度、春の合同法要のあとに浅草浅草寺より塩入亮乗先生をお招きし、『日本人のこころと宗教』と題してお話をいただきます。是非、多くの方のご参加をお待ちしております。入場は無料です。

設計：アキイロ



変わらないものがあります。

お寺も例外ではありません。瑞岩寺も、アンテナを高くして、変わるべきは変わって（そして、守るべきは守って）いこうと考えています。

時代も変わり、葬儀や墓の形も進化した、変わってきています。それでも、亡き精霊を見送る気持ちはいつ、どんな時代になっても変わらないでしょう。

●樹木葬墓地「木もれ陽」 (こもれび)永代供養墓 開眼供養式のご案内

【日時】

平成23年2月5日(土)

午後1時30分～3時(受付開始1時)

【場所】

慈眼山瑞岩寺

【内容】

開眼供養、説明会

【参加費】

無料

【お申し込み・お問合わせ】

お電話、FAX、メールで、瑞岩寺まで

▼皆様、ふるってご参加ください。

お知らせ



【期日】

平成23年3月21日(月) 春分の日

【時間】

午前10時30分～

◆塩入亮乗プロフィール◆

昭和29年 東京生まれ

成城大学文学部文化学科卒業

大正大学大学院仏教史専攻(修士課程・博士課程満期退学)

仏教民俗学を研究課題とする。

現在は浅草法善院住職、浅草寺本堂部勤務、大正大学講師などに従事。



●墓参の際のお願い

墓参の際、墓前にお供えのお供物はカラスや犬猫などが食荒らし、汚れます。佛様は香りとお気持ちのみ頂きますので、お参りが済みましたら、お持帰り下さるようお願い申し上げます。お団子なども下にアルミホイルを敷いていただく掃除がしやすく衛生的です。また、古い塔婆はゴミ箱に捨てないでください。お寺でお炊き上げしますので寺務所へお持ち下さい。

●悩み事・困り事の相談

悩み事・困り事の相談は無料です。必ず電話(37-1231)にて予約してお越し下さい。相談の内容が外部に漏洩することはありません。相談時間は午前9時から午後7時までです。夜間・深夜の相談はお受けできません。

●祈願・厄除など

厄年厄除、家内安全、商売繁昌、身体健康、学業成就、安産守護、家族祈願、自動車祈願...など。

法要は、毎日12時よりお参りいただけます。

ご供養、ご祈願、ペット供養、水子供養は、電話、ファックス、電子メールなどで受け付けております。

●ご喜捨を募集しております。

この度、境内整備の折に山門が立派になりましたので、両側に石像の仁王像を配置したいと願って思っております。もし、ご寄進いただける方がおられましたら、ご一報ください。ご芳名を刻印させていただきます(一体80万円也)。また、パーキングの門碑(一碑15万円)のご喜捨も合わせて募集致しております。

すべての人に佛さまの智慧と慈悲を

宗教法人 慈眼山 瑞岩寺

群馬県太田市矢田堀町 388
Tel: 0276-37-1231 / Fax: 0276-37-1729
E-mail: info@zuiganji.com
Website: http://www.zuiganji.com
i-mode: http://www.zuiganji.com/i/

※御意見、御要望はいつでもお知らせ下さい。
※お身体をお大切に、お健やかに暮らしてくださいませ。
みなさまの御加護を心からお祈りいたします。合掌